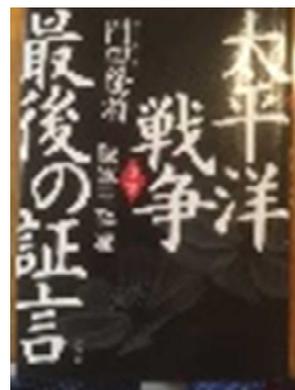


第百六十九話 戦場の武士道精神！

日本陸軍は、ガ島、ニューギニア、インパール、サイパン、比島、硫黄島、沖縄、そして占守島において悲壮な玉砕に見舞われた。その玉砕の戦場から奇しくも生還した兵士の体験・手記は涙なくして読めない。殺し・殺されるという極限下である戦場の惨さに狼狽し、死に直面した人間の生き様を思い、その運命を分けたものが何だったのか等々考えさせられることが多々ある。そのような戦場においても、時には憎き敵同士であっても、武士道的、騎士道的とも云うべき心温まる美談がある。「太平洋戦争、最後の証言」からそれを紹介する。(53p～56pを要約)



1 ラバウル攻略作戦の概要

帝国海軍主要基地であるカロリン諸島のトラック諸島に近いニューブリテン島のラバウルとニューアイルランド島のカビエンは重要な拠点とみなされていた。1942 (S17)年1月中旬以降、日本海軍の南洋部隊の支援を受けた、第十九戦隊司令官志摩清英海軍少将をラバウル攻略の指揮官に任命して攻撃を開始した。日本陸軍の南海支隊(指揮官堀井富太郎陸軍少将)が、攻略部隊の主力であった。1月23日、南海支隊と海軍陸戦隊の攻撃によりラバウルとカビエンは陥落、オーストラリア軍は抵抗少なく降伏した。

ラバウルの港を占領した後、日本軍はこの港を大規模な基地とし、また航空基地を整備した。その米軍によるラバウル空襲(1943/11)、米軍のニューブリテン上陸(1943/12)や豪軍の上陸(1944/11)があったが、ラバウルは終戦まで健在し、69,000人の兵士が居た。

2 豪軍による墜落日本海軍パイロットの埋葬

部隊の先頭がラバウルの市内に前進したが、敵豪軍の抵抗はなく、訝しく思った。暫くして、豪兵が道に一列に並んで敬礼をしていた。その各人の足元には、きちんと武器が置かれている。豪兵約1000名が捕虜となった。その捕虜と親しくなったN達に対し、身振り手振りで説明するには、日本軍が上陸した1月23日の前日日本海軍の偵察機がラバウルの近くの山に墜落したが、彼等が二名の日本海軍パイロットを、きちんと穴を掘って埋葬したという。

豪捕虜の話聞いたNは、海軍航空隊の隊長にそのことを伝えた。海軍側がその現地に行ってみると、埋葬され、しかも墓標まで立ててあったと云う。

日本軍では、{豪軍には武士道精神があるぞ}と話題になり、豪軍捕虜を虐待してはならないという通達が出されたという。

3 感じ入った日本軍の特例措置

豪軍兵士の墜落兵士の取扱に感激したNは、{捕虜に家族への手紙を書かせる。}ことを思いつき、海軍の隊長に相談したところ、その隊長がそれは面白い、是非やろうじゃないかと賛意を示してくれた。相手の紳士的態度に我が方も紳士的対応で応じようというのである。粋な計らいだ。

露見すれば厳罰ものであるもので、捕虜にはその旨を言い含め手紙を書かせた。それを纏めて爆弾代わりにポートモレスビーの上空から豪軍基地に落とした。S17年4月頃。

4 その手紙のその後の消息

その豪軍捕虜は、日本へ輸送される途中で船が撃沈されて落命した。戦後、豪の関係者に調べて貰ったら、郵便袋4つを拾ったとの豪軍資料があった。家族に届いたのか更に調査を継続したところ、調査をお願いしていた豪大使館員から連絡があり、その手紙を受け取った人を見つけたということだった。その手紙を大事にしていた母親は亡くなっていたが、今も母の宝物として大事に保管していると云う。時は既に平成22年也。

*戦場には時に美しい花が咲く。厳密に言えば処罰ものだろうが、あっても良い。清涼剤
(第百六十九話 了)